

11月13日 想像力

私たちは物事を考える際に「言語」を使う。自分の感情を把握する際にも「言語」を使う。あまりに当たり前すぎて気づかないかもしれないが、信じられないことが起きれば「なんで」と口走るし、興奮して涙が出たとき、それがうれしいのか悲しいのか、言葉で自覚している。

「言葉の数」すなわち「語彙」が少なければ思考は薄っぺらになり、感情も整理しにくくなる。幼い子どもが駄々をこねたり、老人が突然キレたりするのはそのためだ。しかし、ただ語彙が豊富なだけではだめだ。なぜなら言葉は記号であり、記号は表面的な意味しかその身にまとえないから。そんなとき必要になるのが想像力である。

日本人では古来から自分の思いを相手に伝えるために「和歌」を用いてきた。最もポピュラーであった短歌形式の和歌は「三十一文字（みそひともじ）」。31音の記号に思いの丈を詰め込んで、恋しい相手に贈ったのだ。当然詠む側も受け取る側も言外の意味を理解した。時には誤解もあっただろうが、文字の裏に隠された思いを、想像力をかき立てて味わったのである。

SNS では心ない投稿が後を絶たない。私は「視覚」に頼りすぎている現在の情報伝達が悪影響を及ぼしているのではないかと考えている。昔は「文」を見て「絵」を想像していた。象を見たこともない江戸時代の絵師が見事に象を描くことができたのは、言葉を想像力でつなぎ合わせることができたからである。

「百聞は一見にしかず」というが、「一见」ですべてを理解することなんてできない。何度も見て、言葉で思考して、想像力をフル回転させて初めて、物事が理解できる。

